



定年後、世界一周ひとり旅

第3回



世界の現実を少しづつ見て

定年後にやりたかった4つのこのうち、一番目だった「世界一周ひとり旅」に向け出発した私は、シンガポールを振り出しに、インド、トルコ、エジプトと旅を進めていました。上空から見たエジプトの砂漠都市カイロは、他の遺跡同様すさまじい砂嵐にひとたまりもなさそうでした。インドの世界遺産の寺院の庭で寝かされていた赤ん坊には、学校へ行くことも字の読み書きも保障されておらず、親の職業を継ぐ未来しかない知らされた時はショックでした。トルコのボスポラス海峡の船着き場へ続く歩道橋の上に並んだ物乞いの母子がこちらを見上げた目も忘れられません。格差や貧困、民族紛争などのほんの一端を垣間見た日々、この世界はどうなっているのだろうかと考えさせられました。相互に理解し合い助け合うこと、言葉では簡単だけど実際の国際社会の場をつくっていくには今より人は寛容になるとともに、「足るを知」って生きなくてはいけないのでは、とも思いました。

砂漠の大地から海を越えてギリシャ上空に入ると、地上は一転して緑に覆われていました。アテネの街も街路樹の花々が鮮やかな色あいを競っていました。しかし、ギリシャに入った途端、激しい下痢に襲われました。持参していた正露丸が効きません。アテネの薬局で薬を求め、しばらく絶食し、何とか回復しました。悪いものを食べた記憶はありません。きつと、インド、トルコ、エジプトで立て続けに受けた異文化ショックのせいでしょう。体調不良の私を癒してくれたのは、花々だけではありません。ホテルの部屋にバスタブがあったのです。18日ぶりに入浴できると思ったら、バスタブが光り輝いて見えました。しかし、物事はそう簡単に思うようにはなりません。湯を溜めるのに不可欠の排水の止水栓がないのです。あれこれ考えて試行錯誤した結果、湯船に満杯の湯を溜めることができず、ゆつたりと湯船に浸かる自分をセルフタイマーで撮って、フェイスブックで発信しました。「まだまだ生きる力があります」と。

ギリシャから先はアイルランドまで、欧州EU圏の旅です。これまでよりは少し気持ちに余裕が出ているのが自分でもわかりました。原因は私が普通の日本人らしくアメリカナイズ、ヨーロッパナイズされているからだと思えます。こうした傾向が脱亜入欧以来、多くの日本人にもあるせいで、日本は自分の周りの国々の人々とうまく付き合えないのかもしれない。

アテネの公園の芝生に寝っ転がっていた私に声をかけてきたギリシャの青年は、ロンドンで経済学を勉強中でした。

「ギリシャの経済はこれから先どうなる？」

「いや、もうだめだろう。それより、日本の女性はいくらも素敵だよ」

「そうかね。ギリシャの女性も素敵だよ」

「いや、歳をとったら、みんなそれなりさ」

こういう会話でも、市民レベルでの相互理解、国際交流につながるかもしれません。

ウーン登ベルリン経由ワルシャワ行き overnight 寝台列車では、オーストリア在住の男性と相部屋でした。

ハンガリーの話になって、私が「東欧ではハンガリーがいち早く民主化したけど、経済はうまくいってないんだね」と聞くと「あそこはコミュニニストがそのままシヨナリストになっただけだから」と彼。さらに「二番いい



熊野 譲
【くまの・ゆうずる】
1953年山口市生まれ。国内外の旅、鏤絵（家の壁などにつくられる漆喰のレリーフ）画像の収集、下手なゴルフを趣味とする部分年金生活者。元公立中学校教師。下関市在住。

車窓の旅。
最後尾からの眺めも
いいものです



アテネの食堂で。
ひどい下痢の後なのに



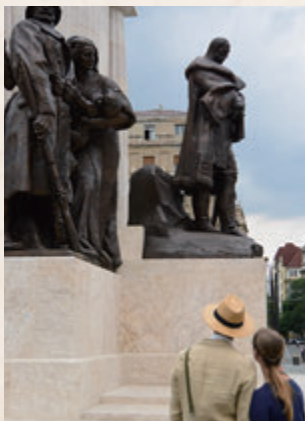
ベルリンのアンネフランクセンターはあいにくの
休館日



ヨーロッパで一番退屈な首都だそうです。ブラチスラバ
のマンホールおじさん



万華鏡の中にいます。
パリにて



ブダペストの若い男女。
ほれぼれするカップル
でした

のはチェコだぜ」と彼が言ったので、数年前にチェコに行った話をしました。2人が一致したのは「ビールはチェコ！」でした。

これも市民レベルの平和な交流でしたが、一方では危機一髪、恐怖の「交流」もありました。

ブダペストのホテル前でバスを待っていると、スーツ姿の男性が顔写真付きの身分証明書を見せながら声をかけてきました。

「警察です。パスポートを拝見します」

「ホテルに置いてあります。コピーでよければありますが」

「だったら、それを見せなさい」

私が財布からコピーを取り出して見せると、「最近、アジア人がニセ札をよく使うので、

あなたの持っている紙幣を見せなさい」

ここまで何も疑っていない私は、手元の紙幣を彼に渡しました。すると、彼は1枚1枚チェックするのですが、不思議なことにチェックし終わった紙幣は彼の袖口の方に移動していくのです。

「ちよつと待て！」「おい、待てよ！」と、

私は大きな声を上げて彼の両手首を押さえました。すると刑事は、私の手を振りほどくと雑踏のほうへ走って逃げていきました。

ニセ刑事だと頭がきちんと理解したのは、その後でした。全身を震えが走りしました。

アイルランドのダブリンへ向かうフェリーが出航するイギリスのホーリー・ヘッドでは、なんとタクシーに財布を置き忘れました。気が付いたのは降車してからかなり後、タク

シー乗り場には影も形もありません。

現金はもちろんですが、ATMで現金を引き出すカードも財布の中です。タクシーの会社もわかりません。昨夜泊まったB&B(朝食付きの民宿)は朝は無人でした。

万事休す、と思った時にタクシーの降車場所と乗車場所が全く違うことに気が付きました。もしやと思つてそちらへ走ってみましたが、私の乗ったタクシーは見当たりません。

嘆息、まさに嘆息したその時、遠くからこちらへ向かってくるタクシーが1台。近づくにつれて、私が乗った車に形が似ていることがわかりました。そばまで来て、運転手も私に気が付き、運転席から「どうした？」と。奇跡が起きました。私の財布は後部座席の真ん中に鎮座していたのです。